



「水神」「日神子」「アフリカの瞳」4冊目かな？ この人の本を読むのは？ どれもボリュームのある本であるで、引き込まれて読んでしまい感動がある。

一応の知識はあるつもりでも、ここまでひどかったのかと、改めて大仏作りの国民に強い負担の重さを感じる。

高さ 18m幅 20mの大仏を700年代のあの時代に作った技術にも驚くが（中国、韓国からの鑄造の技術）9年か10年間という長い年月と260万人の働きがあったのにまず驚く。この本では山口県から富山までの人足が集められた。行きは大事な労力として、連れてこられた人足も5年、6年の過酷な労働のあとは自力で帰らねばならない。

海賊、山賊、飢えや病で無事故郷に帰り着くものは少ない。主人公の今の山口県から来ている国人の場合、15人の村人が来ていたが無事帰えり着いたのは国人一人であった。

エジプトのピラミッドやスフィンクスも過酷な奴隷などの働きで作られたのはよく知られたことだけれど、「大仏お前もか！」と思う。仏の名のもと、天皇の名のもとこんなことしていいのかと為政者に怒りを感じる。

その反面、この中で前向きに生き抜いた国人は、周りに光りと力を与えた。そしてなにより読み手に希望と力を与えてくれていると思う。奈良のある坊さんが「あなた方が仏だ」と言われていたが、帯木もそれが言いたのかもと思った。

帯木の本は史実を調べに調べ、それを骨組みに想像豊かに肉付けしているように思う。それを想像して読むのも面白い。

また、文章だけでは奈良の大仏の作り方がイメージできないので、ネットで調べてより理解できた。そして、改めて国人らの大変さがわかった。

読み終えて、律令政治の行つまり、朝廷政治の行つまりがこのあたりから始まったのかな？ふと感じた。誰かに尋ねてみたい気がする。

